

1 作 物

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 水稲の用水不足に備えた栽培管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○水稲の用水不足に備えた栽培管理 ○水稲の水管理 ○水稲の病虫害防除 ○水稲の穂肥 ○大豆のは種と管理 <p>6月16日高松地方台気象台発表の1か月予報では、気温は平年より高く、降水量および日照時間は平年並の見込みである。5月以降、降水量の少ない状況が続いており、今後も少雨傾向が続けば生育等への影響が懸念される。利水調整について地域内で話し合いを進めるほか、農業用水の有効活用に努める。</p> <p>土畦畔ではモグラ穴、コンクリート畦畔ではコンクリートの継ぎ目等からの漏水防止を図る。なお、かけ流し灌漑は用水を大量に必要とするので極力控える。</p> <p>除草剤散布時は、用水が十分確保され、水深3～5cmで田面露出のない状態で処理する。</p>
<p>(2) 水稲の水管理</p>	<p>早期栽培では出穂・開花期を迎え、水を最も多く必要とする時期であるため、やや深水管理とする。</p> <p>普通期栽培では、浅水管理や間断かん水を基本とし、根の健全化を図る。田植後30日頃から、7～10日程度中干しし、過繁茂や無効分けつ発生を抑える。漏水しやすい水田では、強い中干しを行うとその後の水持ちが低下する場合があるので、過度な中干しは控える。</p>
<p>(3) 水稲の病虫害防除</p>	<p>ア いもち病</p> <p>梅雨時期はいもち病の発病適温(24～26℃)にあたり、稲体の本病への感受性が高まる。葉いもちの発生は降雨や曇天日が継続すると助長されるため、常発地では十分注意し、初期病斑を確認したら治療効果のある薬剤で早めに防除する。置苗は本病の発生源となるので、補植後は水田内に放置せず早期に除去する。穂いもちの発生を防ぐため、出穂期防除を必ず行う。</p> <p>イ 紋枯病</p> <p>普通期栽培では、通常7月中・下旬より発病が始まる。生育旺盛で、茎数が多いほ場で発生しやすい。防除の際は、薬剤が株元まで十分に届くように散布する。</p>

ウ 斑点米カメムシ類

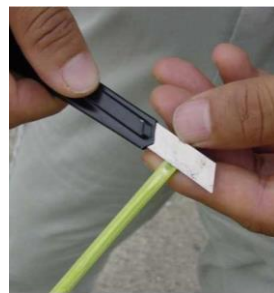
多発すると等級格下げ要因となるため、早期米では発生源となるほ場周辺の除草を徹底する。なお、出穂直前の除草はカメムシ類をほ場内に追い込むことになるため、出穂 15 日前までに除草を終える。ほ場周辺の除草は、出穂 3 週間前と出穂時に 2 回実施すると効果的である。出穂時の定期防除でカメムシ類密度を下げ、乳熟期～糊熟期（出穂後 10～15 日頃）を目安に地域の防除指針に従って薬剤防除する。多発時には 7～10 日後に追加防除を行う。粒剤を施用する場合は、出穂 7 日後頃に散布する。乳熟期に捕虫網で 20 回すくい取り調査し、要防除水準（大型種では 1 頭）になっていれば防除する。

(4) 水稻の穂肥

短期栽培のコシヒカリ、あきたこまちでは穂肥の施用時期であり、適期は幼穂長を目安に判断する。生育中庸な株の最長稈を地際から抜き取り、カッターナイフで茎を縦に切って幼穂長を計測する（写真 1 参照）。3～5 回繰り返し、平均値を算出する。コシヒカリは幼穂長 8～15 mm（出穂前 18～16 日）、あきたこまちは 3～8 mm（出穂前 20～18 日）が穂肥施用適期である。10 a あたりの施肥量は、コシヒカリはチッ素とカリがそれぞれ 3 kg、あきたこまちではチッ素 4 kg、カリ 3 kg が基準であり、葉色が濃ければ減肥する。



最長稈の選定



茎を縦にカット



幼穂長測定

写真 1 幼穂長の測定方法

(5) 大豆のは種と管理

7 月は大豆（フクユタカ）のは種期である。天気予報に注意し、計画的に作業を進め、適期は種（6 月下旬～7 月中旬）に努める。

ア 渇水対策

今後、少雨傾向が長期化した場合、は種後の乾燥による発芽不良を防ぐ必要がある。碎土、整地、は種時の覆土・鎮圧は丁寧に行う。干ばつが生じやすいほ場では、土壌の保水性を改善するため深耕や堆肥施用等を実施する。

イ 湿害対策

少雨傾向の一方で、梅雨末期は大雨となることもあり、湿害対策は欠かせない。大豆は湿害に弱いいため、は種前には弾丸暗きよやほ場周囲溝（額縁明きよ）を設けるなど排水対策を講じる。また、は種後は滞水しないように、ほ場内に5～10 m間隔で明きよを設ける。出芽不良や子葉の黄変、落葉など、湿害により生育不良となるとその後の回復は難しい。雑草も繁茂しやすくなり、大豆収量は大幅に低下するため、播き直すことも検討する。

ウ 雑草対策

は種後は、すみやかに土壌処理剤を散布して雑草の発生を抑える。雑草が小さいうちに茎葉処理剤や中耕培土で除草し、畝が大豆で完全に覆われるまで管理する。特に、帰化アサガオ類（写真2）はつる化前に除草することが重要である。



写真2 帰化アサガオ類類

エ 中耕培土

除草や倒伏防止を目的に中耕培土を行う。1回目は本葉2～3葉の展開期に、子葉節が隠れる程度に実施する。2回目は本葉5葉期に、1葉節が隠れる程度に中耕培土する。

（作成 農林水産研究所）